

戦後国語教育実践についての研究

— 橋本武の灘中学における『銀の匙』（中勘助）の指導実践を中心に —

菅原 稔

Keywords：橋本武 灘中学校 スローリーディング 中勘助 『銀の匙』

1. はじめに—研究の意図と目的—

橋本武（はしもと・たけし 1912～2013）は、戦前・戦後を通じて兵庫県神戸市の私立灘中・高等学校の国語教師を勤めた。この間、とくに灘中学校で、3年間をかけて中勘助の『銀の匙』（岩波文庫版・本文209ページ）のみを教科書として詳細に読み解く、「スローリーディング」と呼ばれる独自の学習指導を行った。その指導は、現在も、「公立高のすべり止めだった灘校を東大合格日本一へ導く」大きな要因となり、また同時に、「作家の遠藤周作，神奈川県知事の黒岩祐治，東京大学総長，最高裁判所事務総長，数多くの医師ら，日本のリーダーたちを育てた。」^(注1)と高く評価されている。

橋本武は、1984年3月（72歳）の退職後も、請われて何度か灘中学校の教壇に立つとともに、その教育観や指導観、あるいは学習観や実践の記録等を公にしている。

いま、それらの橋本武の著書およびその実践に直接・間接に言及した著作を、その刊行年代順に取り出すと、それは、それぞれ、次のようなものである。

・橋本武の著書

- ①『伝説の灘校教師が教える一生役立つ学ぶ力』 2012.2.1 日本実業出版社
- ②『〈銀の匙〉の国語授業』 2012.3.22 岩波書店
- ③『100歳からの幸福論 伝説の灘校教師が語る奇跡の人生哲学』 2012.7.11 牧野出版
- ④『橋本式国語勉強法』 2012.10.19 岩波書店
- ⑤『銀の匙 中勘助 橋本武案内』

2012.10.11 小学館

⑥『日本人に遺したい国語・101歳最後の授業』 2013.11.25 幻冬舎

⑦『灘校・伝説の国語授業 本物の思考力が身につくスローリーディング』

2014.1.23 宝島社

⑧『伝説の灘校国語教師の「学問のすずめ」』 2015.3.17 PHP 研究所

・橋本武の実践に言及した著書

①平野啓一郎『本の読み方・スローリーディングの実践』 2006.9.1 PHP 研究所

②黒岩祐治『灘中・奇跡の国語教室 橋本武の超スローリーディング』 2011.8.10 中央公論社

③十川信介『中勘助「銀の匙」を読む』 2012.9.14 岩波書店

④伊藤氏貴『エチ先生と「銀の匙」の子どもたち・奇跡の教室・伝説の灘校国語教師・橋本武の流儀』 2012.10.21 小学館

本稿では、主に、これらの著書によって、橋本武の教育・国語教育（観）とともに、その実践を支えてきた考え方、特質を考察し、その成立過程、内容、方法等を明らかにする。それによって、我が国の中等学校における国語（科）教育の一つの特質と成果および到達点をとらえ、今後のあり方への示唆を得ることができればと考える。

2. 橋本武の国語科の授業—「スローリーディング」の出発—

橋本武の国語科の授業（国語科教育実践）を特色づけるいくつかの事柄のうち、最も大きなものとし

て、先にもあげた、いわゆる「検定教科書」を一切用いず、『銀の匙』（中勘助 岩波文庫版）のみを用いる授業（スローリーディングによる授業）をあげることができる。

なぜ、いわゆる「検定教科書」の教材ではなく『銀の匙』なのか、そのことについて、橋本武は、いくつかの理由を挙げている。なかでも、最も大きな理由として繰り返すのは、次のような、自身の体験に起因する事柄である。

読書に縁のなかった私が国語好きになったのは、小学校三年のときに出会った国語の先生の影響です。先生は、当時の薄っぺらな国語読本は使用せず、講談社で出し始めた分厚い講談本を読んできました。つまり、国語の授業はもっぱら講談の話だったのです。真田幸村、塙団右衛門直之、三好清海入道など、まさに血沸き肉躍る豪傑たちの物語で、毎回わくわくしながら聞き入ったものです。……読まなければならないのではなく、読むのが楽しくて仕方がない。……この先生との出会いがなければ、私が国語教師への道を歩むことはなかったかもしれません。^(注2)

京都府の北部、日本海沿いの町、宮津（みやづ）で明治45(1912)年に生まれた一人の少年にとって、そこは、必ずしも十分な図書館や書店のある、恵まれた読書環境の地ではなかったことが想像される。だからこそ、文字通り「血沸き肉躍る」講談本との出会いが、幼い日の楽しく躍らせた、忘れることのできない読書体験となったと考えられる。

また、橋本武は、その国語教育実践を特色づける「読むこと」の指導（スローリーディング）の原点として、次のような体験も、繰り返し述べている。

東京高等師範学校時代、縁あって漢文学者諸橋轍次先生の仕事をお手伝いさせていただきました。…（中略）…その後、中国でも重宝される世界最大の漢和辞典、『大漢和辞典』全十三巻の編纂作業を手伝います。…（中略）…じっくり考える、きっちり調べる。その姿勢が、後に注目されるようになったスローリーディングの基盤になったのかもしれません。本当に役立つことは、じっくりと時間をかけて学ぶことが必要です。それが、一生の宝になるのです。^(注3)

確実に正確に、一つ一つの文字（漢字）を定位し、そのゆるぎない根拠を誤りなく検索し記述していく。

このような辞書作りの作業では一点の誤記も許されない。一つの誤記は辞書全体への信頼を揺るがすことになるからである。だからこそ、その作業は、文字通り、気の遠くなるような、大きな労力を要す

るとともに、他方で、その作業に参加した者にしか体験できない充実感、達成感、満足感を与えるものであったに違いない。ここにも、橋本武の、後の、徹底したスローリーディングによる学習の原点をみることができる。

橋本武の国語教室における独自の学習指導法は、ここに挙げた故郷・宮津での、胸躍る講談本との出会い、『大漢和辞典』の編纂への参加を許し数多くの事柄を学ぶ機会を与えた諸橋轍次の膝下での時間の二つを、後の国語教師・橋本武誕生の「正」の体験とするとき、その対極に、同じく、国語教師・橋本武誕生の二つの「負」の体験が見い出される。それは、終戦（敗戦）を境とした、次のような苦悩と、それに基づく再出発である。

……社会人になってからも、生徒が思い出し、人生の役に立つようなことを教えたい。生徒の心に生涯残り、生きる糧となる授業をするにはどうしたらいいのだろうか……と思案する日々が続きました。

そして翌二十年に終戦……授業を再開する前に、私たちが最初にしたことは、教科書の黒塗りでした。……教科書を開いてみれば、黒々とした塗りつぶし…。こんなもので授業はきかないと思い、思いきって教科書を捨てることにしたのです。

そして、何か教科書の代わりになるようなテキストがないかと周囲を探したとき、『銀の匙』が目にとまりました。『銀の匙』は、大正の初めに「朝日新聞」に連載された中勘助先生の自伝の小説です。

文体が美しく、子ども世界の情景がみずみずしい感性で描かれています。

…（中略）…『銀の匙』を熟読することを通して、生徒一人ひとりの人生の糧になるような授業を展開していこう。そう心に決めたのでした。^(注4)

終戦直後の教師たちが体験した教科書の「黒塗り」「塗りつぶし」は、橋本武がそうであったように、それまで自らの言葉をまじめに聞き、従ってきた児童・生徒に対して、「もっともしてはいけない教科書を汚す」ことを逆に強要することであった。それは、ある意味で、教師としての自らを否定することにもつながる行為であった。したがって、「黒塗り」「塗りつぶし」は、橋本武にとって、「教科書」だけではなく、与えられる“権威”である「教科書というもの」の否定でもあったと考えられる。だからこそ、「教科書」に対する「こんなもので授業はできない。」という橋本武にとって、信じることのできる「子ども世界の情景」「みずみずしい感性」に満ちた、自

らがあこがれる「中勘助先生」の「魅力的な『銀の匙』」こそが、教科書になり得たのである。その後も「銀の匙」の指導に情熱を燃やす橋本武の胸中には、ここに述べられている「黒塗り」「塗りつぶし」の体験が忘れられずであり、その苦渋の経験が、『銀の匙』への新たな情熱の原動力となったと考えられる。自らが全力で「教える」ことのできる教材だからこそ、生徒にとっても生涯「忘れられない」ものになるに違いない。そのような確信に基づく周到で精緻な指導への夢が、自らが全力を傾けることのできる「銀の匙」への着目となったのである。二度と墨ぬられることのない教材「銀の匙」を丁寧に、また、慈しむように読み進めて行く橋本武の胸中には、常に「黒塗り」「塗りつぶし」の経験が去来したに違いない。だからこそ、橋本武は『銀の匙』の授業を全力でしようとした。スローリーディングで扱う「銀の匙」のどこにも、「黒塗り」「塗りつぶし」をするべき箇所はなかったのである。

このように理解すると、橋本武の『銀の匙』のスローリーディングの授業は、「黒塗り」「塗りつぶし」という、いわば「負の体験への『反転』」として成立したと理解することが出来よう。

3. 橋本武の国語科の授業—「スローリーディング」の基底—

橋本武の40年に及ぶ教師生活のほとんどは、中勘助の『銀の匙』とともにあったと言っても過言ではない。

この中勘助の『銀の匙』について、和辻哲郎は、その「解説」（岩波文庫版巻末）で、次のように述べている。

この作品の価値を最初に認めたのは夏目漱石である。漱石はこの作品が子供の世界の描写として未曾有のものであること、またその描写がきれいで細かいこと、文章に非常な彫琢があるにかかわらず不思議なほど真実を傷つけていないこと、文章の響きがよいこと、などを指摘して賞賛した。^(注5)

ここで和辻哲郎が紹介する夏目漱石の『銀の匙』への評価は、ほぼそのまま、橋本武の「……社会人になってからも、生徒が思い出し、人生の役に立つようなことを教えたい。生徒の心に生涯残り、生きる糧となる授業をする…」という願いと一致する。中勘助の『銀の匙』は、夏目漱石や和辻哲郎が称賛する優れた文学作品であるとともに、橋本武にとって、文字通り、「負」の体験を乗り越えるための「正」の体験を象徴するものであった。

だからこそ、橋本武は、この『銀の匙』を次のよ

うに高く評価するのである。^(注6)

- ①・主人公は十代の少年であり、生徒たちが自分を重ね合わせて読みやすい。
- ②・夏目漱石が激賞したほど日本語が美しい。
- ③・明治期の日本を緻密に描いており、時代や風俗考証の対象になりやすい。
- ④・新聞連載であったため、ひとつの章が短く授業で取り扱いやすい。
- ⑤・やや散文的に書かれているため寄り道しやすい。

ここで橋本武があげる『銀の匙』の教材としての長所のうち、例えば、生徒が①の主人公と「自分を重ね合わせて読」むためには、時代背景や当時の生活、環境、考え方などへの理解や共感が必要であり、同様に、②の日本語の美しさへの気づきも、③の綿密な「時代や風俗考証」も、必要になる。そのため④深く読む、共感して読む、⑤の同時代人としての近親感を疑似体験すること、等が必要であろう。そのような、単なる読み・読解を超えた深く豊かな読みを、文字通り「楽しむ」ことなしには、ただ知的に分析して「解説」するだけでは、橋本武の言う「……社会人になってからも、生徒が思い出し、人生の役に立つようなことを教えたい。生徒の心に生涯残り、生きる糧となる授業をする」^(注7) ことにはならないであろう。

このような考えから、橋本武は次のような4つの活動を柱とする授業を考える。いわゆるスローリーディングの内容である。^(注8)

- ①・寄り道する。
- ②・追体験する。
- ③・徹底的に調べる。
- ④・自分で考える。

上の①では、例えば『銀の匙』の「前篇十一」にある「私は毎朝早く起されて草ぼうぼうの地を跣で歩かされる。」では、まず「ぺんぺん草」とはどういう草か、春の七草には、どんなものがあるか、春の七草の名前の覚え方、七草粥をなぜ食べるか、食べた経験はあるか、食べることを知っているか、百人一首に登場する光孝天皇の「君がため」の歌について、「七草なずな」の歌について、…と、生徒から、また教師からプリントで、あるいは口頭で話題を提供する、というものである。また、『銀の匙』に「駄菓子」が出てくれば教師が、あるいは生徒の有志が様々に「駄菓子」を準備し、口にした感想を自由に発表し歓談する。このような授業展開によって、「たった1ページ進むだけでも、2週間かかったりすることもざらでした」^(注9) とのことであるが、この「①・寄り道する」の例から「②・追体験する」以下のおおよその内容も推測される。

ただ、ここで挙げた①から④の活動は、教師にとっ

ては、ある意味で『銀の匙』の文章に親しみ、その内容を、文字通り読み解き、理解するためのものである。したがって、①から④までの活動の中では、必要に応じて、㉞・タイトル付け、㉟要約、㊱自作の『銀の匙』作り、が行われる。『銀の匙』は新聞連載であったために各章が短だけでなく、その冒頭には「八」「四十七」等の通し番号がふってあるだけである。そこで、各自が自らの考える「タイトル」を付けて、その「根拠」とともに発表しあう。さらに、様々な話し合いを終えた後に、最後の200マス目に句点を入れることを約束として文章を要約する。このような活動の後に、「寄り道する」「追体験する」等の活動をふまえて、自分の『銀の匙』を書く。

一般的な「指導過程」の形に整理すると、

①・通読する→②・寄り道する→③・追体験する→④・徹底的に調べる→⑤・自分で考える(㉞・タイトル付け→㉟・要約→㊱・自作づくり)とまとめることができる。

この中勘助の『銀の匙』(岩波文庫版)は、注と解説を除いた本文は209ページ、その内容は、前編が53編、後編が22編の計75編である。したがって単純計算で1編あたり3ページ弱の比較的短い文章によって構成されていることになる。この1編あたり3ページ弱の75編を中学校3年間をかけて読み通す(単純計算で1年間で25編、1カ月で約6ページ引用者)わけである。

このようなゆっくりとした指導(文字通りのスローリーディング)ではあるが、生徒にとっては、決してスローな(ゆっくりとした)学習ではなかったであろう。教師が語る話を、あるいは発問を、ただ聴いて反応するだけの受け身の授業ではなかったからである。

橋本武は先にも引用した、

①・寄り道する。 ②・追体験する。 ③・徹底的に調べる。 ④・自分で考える。

ことを徹底して行う授業(スローリーディング)を体験することによって、次のような力がつくと言う。^(注10)

スローリーディングによって身につく力

1. 語彙が増える。
2. 自分で考える力がつく。
3. 文章力が向上する。
4. 記憶力がアップする。
5. 調べる力がつく。
6. 言葉に敏感になる。
7. 読み解く力が強くなる。
8. 好奇心が刺激され、学ぶことが楽しく

なる。

ここに挙げられている8つの項目は、いずれも、学習者がその活動(「調べる」ことへの興味・関心、及び、主体的なかかわり)に自ら参加したときに形成されるものである。従来、一般的な国語科の指導方法として習慣化されてきた、「通読—精読—味読」の指導過程を、ただ機械的に繰り返すだけでは、言い換えれば、学習者の「学び」への主体形成を等閑に付したままの指導では、国語力は到底形成されないであろう。あくまでも学習に興味・関心を持ち積極的・主体的に学習活動に取り組もうとする意欲・姿勢が形成されたとき、言い換えれば、「①寄り道をする」以下の活動と「1. 語彙が増える」以下の成果が結びついて学習者に実感されたとき、橋本武の言うスローリーディングが成立し、大きな成果をもたらしたことになるのではないだろうか。

4. 橋本武の国語科の授業—スローリーディングの実際—

上にその指導過程としてあげた、スローリーディング—①・通読する。→②・寄り道する。→③・追体験する。→③・徹底的に調べる。→④・自分で考える。—の学習が真に生徒が求め楽しむ、あるいは充実感や達成感を感じる主体的で積極的な活動にならないければ、「生徒が楽しむ寄り道」にも「生徒が求める追体験」にもならない。中勘助の『銀の匙』が、すでに引用した通り「主人公は十代の少年であり、生徒たちが自分を重ね合わせて読みやすい。」(18ページ)ことは事実である。しかし、『銀の匙』が執筆されたのは1913(大正2)年4月から1915(大正4)年6月にかけての間であり、橋本武の学級の生徒との時代の開きは大きい。したがって、この『銀の匙』の作品をそのまま生徒たちに与えても、生徒たちが簡単に理解し共感することは難しいのではないだろうか。むしろ、その内容が古くて分かりにくく、面白くないものとして受け取られてしまうか可能性がある。だからこそ、橋本武は、その生徒が感じるであろう壁を乗り越える方法として、積極的に「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える。」読みを行おうとしたと考えられる。その指導は、もちろん、教師が主導し一方的に解説し説明する講義形式の授業ではない。あくまでも、生徒が興味・関心を持ち、積極的に喜んで、また楽しみながら主体的に参加する授業—「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える。」—であったはずである。その授業によって、生徒たちは新しい体験をし、新しい語彙を獲得し、知識を得て、文学との出会いの面白

さを経験する。そうでない生徒が喜んで、主体的に取り組むスローリーディングの授業にはならないからである。

さて、橋本武の『銀の匙』の授業を彷彿とさせる資料がある。それは、『銀の匙 中勘助 橋本武案内』と題された、『小学館文庫』の1冊である。この『銀の匙 中勘助 橋本武案内』の「はじめに」に、橋本武の次のような文章がある。^(注11)

このようにして出来た教材研究のノートに基づいて授業を始めることになりましたが、この時の私の方針として、こちらの調べた結果を生徒に注入するのではなく、「こちらの研究した過程を生徒も体験することができるようにしたい」と、その気持ちを下地にした『銀の匙研究ノート』というプリントにして生徒に配布することにしました。

これは生徒自身が自ら行動し、持てる力を自ら開発していくという勉強姿勢を引き出し、興味をいだいて積極的に取り組む傾向を強め、それが国語ばかりでなく他の教科にも及び、広く生活態度の活性化にもつながっていったように思われます。

今回、この『銀の匙』に添えられた私の解説の進め方は、編集者のご意向によって、私の教室での授業の語り口に彷彿たるものがあって、読者の方々がまるで『銀の匙』の子どもとなり、教室で授業を受けておられるような感じを味わっていただけるのではないかと思います。

ここに述べられている「こちらの調べた結果を生徒に注入するのではなく」「こちらの研究した過程を生徒も体験することができるようにしたい」「持てる力を自ら開発していくという勉強姿勢を引出し、興味をいだいて積極的に取り組む傾向を強める等の言葉は、先に繰り返し引用した、橋本武の「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える。」という言葉をもとに具体的に言いかえたものとも理解される。

ここで、上のような意図で作成された教材の一例として、『銀の匙 中勘助 橋本武案内』の中から、比較的短い「四」と「十」を、橋本武の「解説」とともに取り出すと、それは、次のようなものである。

四

私は家のなかはともかく一足でも外へでるときには必ず伯母さんの背中にかじりついていますが、伯母さんのほうでも腰が痛いのが腕が痺れるのとおぼしなからやっぱしはなすのがいやだったのであろう。五つぐらいまでは殆ど土のうえ

へ降りたことがないくらいで、帯を結びなおすときやなにかにどうかして背中からおろされるとなんだか地べたがぐらぐらするような気がして一所懸命袂のさきにへばりついていなければならなかった。そのころ私は浅葱のしごきを胸高にしめ、小さな鈴と成田山のお守りをさげていた。それは伯母さんのくふうで、お守りはもとより怪我のないため、溝や川へ落ちないため、鈴は伯母さんが眼がかすんで遠くが見えないので、もしやはぐれたときにその音をききつけて捜しにこようというのである。併し年が年じゅう背中からおりたこのない子鈴もお守りも実はまったく無用のものであった。私は虚弱のため智慧のつくのが遅れ、かつ甚だしく憂鬱になって、伯母さん以外の者には笑顔を見せることは殆どなく、また自分から口をきくことはおろか家の者になにかいわれてもろくに返事もせず、よっぽど機嫌のいい時ですらやと黙ってうなずくくらいのもので、意気地なしの人みしりばかりして、知らない人の顔さえみれば背中に顔をかくして泣きだすのが常であった。私が痩せほうけて肋骨があらわれ、頭ばかり大きくて目がひっこんでたため家の者はみんな章魚坊主 章魚坊主といていたが、自分ではわが名の□ぼうを訛って □ぼんと名のっていた。

四・解説

主人公に「章魚坊主」という渾名がつけましたね。このように、見た目や性格からつく渾名には、ほかにどんなものがあるのでしょうか。私は生徒たちに「エチ」先生と呼ばれていましたが、これは「エチオピアの王子様に似ている」というのが理由でした。

とても痩せている女性を骨皮筋子と言ったり、石頭で融通ののきかない人のことを、石部金吉などと言ったりします。無賃乗車をする人のことは、薩摩守と呼びます。これは薩摩守忠度から転じて「只乗り」というわけです。

人の渾名だけではありません。川の呼び名にも、坂東太郎、筑筑紫二郎、四国三郎があります。それぞれ、利根川、筑後川、吉野川のことでです。

こういった、人名になぞらえた言葉を擬人語と呼びます。^(注12)

十

病身者の私はしょっちゅうお医者様の手をはなれるまがなかったが、仕合せなことには烏犀

角の東桂さんが間もなく死んだので代わりに「西洋医学」の高坂さんにみてもらうようになり、東桂さんが一所懸命ふき出さした腫物は西洋の薬できれいに洗われてじきによくなってしまった。この人は顔の怖いに似ず子供の機嫌をとることが上手だった。で、それまで東桂さんのまずい煉菓にこりごりしていた私も喜んで甘味をつけた水菓をのむようになった。そのうち私と母の健康のためにどうでも山の手の空気のいいところへ越さなければという高坂さんの説によって、幸いそのとき殿様のほうの御用もひとつお片附いて暇になってた父は自分の役目を人にわたして小石川の高台へ引越すことに決心した。

いよいよひき移るといふ日にはみんなして私にもうこの家へは来られないのだということをよくよくいってきかせたが、私は出入りの者が手伝いにきて大騒ぎをするのが面白く、また伯母さんと相乗りのにせられて俵を列ねてゆくの嬉しくて元気よく喋っていた。

暫くして路がだんだん淋しくなり、しまいに赤土の長い坂をのぼって—それまで坂というものをしらなかった。—今度の住居だという杉垣に囲まれた古い家についた。

十・解説

にんべんに車で「俵」という文字が出てきました。人力車のことです。これは中国にはない我が国で作られた漢字体の文字で、こういった文字のことを和字、または国字といいます。どんな和字を知っていますか。

少し、挙げてみましょう。顔かたち、すがたを意味する俳吹き下ろす風を意味する颯、銚は物の合わせ目をとめる両端の曲がった釘のことです。

袴は昔の礼装の一種、袴は足袋などを留め合わせる爪形のもの銚は頭の大きな釘。

魚の鯛、鱧、鱈、鯰。鳥の鳴、鶉。植物の笹、柝。当用漢字になっているものには、込(む)、峠、畑、働(く)、匂があります。

ここに挙げたのはほんの一例です。

ほかにも探してみてください。^(注13)

ここで取り上げたのは、『銀の匙』の各編(前篇53遍、後編22編)のうちの、比較的短い「四」と「十」の二編であるが、中勘助の『銀の匙』中の文章、および脚注として記された橋本武の「案内」—ここでは資料の都合で各文章末に「解説」として引用—の

おおよその姿が理解できる。橋本武の言うように「文体が美しく、子ども世界の情景がみずみずしい感性で描かれて」いることは事実であろう。しかし、このままでは、現代の中学生を夢中にさせるほどの興味を引くものとは思えない。この作品に興味・関心を持たせるきっかけを与えるものとして、言い換えれば、中学生が、この『銀の匙』の文章に興味・関心を持ち「読もう」とする姿勢を引き出すものとして、『銀の匙 中勘助 橋本武案内』で橋本武が「解説」として添えた文章がある。上の引用の「四」では「渾名」「擬人語」が、「十」では「和字」が、それぞれ取り上げられている。これらは『銀の匙』の「四」「十」の主題やテーマではない。あくまでも、生徒が関心を持って読み始めるきっかけの一例として提示しているのである。例えば、「魚の鯛、鱧、鱈、鯰」をきっかけに一人の生徒の「私の小学校の同級生に『鱈目』という苗字の人がいて走るのが早かった。」という発言から話題が展開し、「煉菓」の「煉」のつく人の名前、「森鷗外」の「鷗」、夏目漱石の「漱石」の意味、さらに小説家のペンネーム集めへと発展することも考えられる。文字通り、一つの文字や語彙、表現をきっかけとして始まった学習が、「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える。」ことによって、様々に発展・展開していくのである。

さて、中勘助の『銀の匙』を用いて行われた橋本武の国語教室は、具体的に、どのようなものであったのか。その様子を彷彿とさせる典型的なものの一つに「駄菓子屋」を取り上げた『銀匙』前篇の十三がある

いま、その授業の様子記録の一部を取り出すと、それは、次のように記述されている。^(注14)

文庫本の一節(『銀の匙 前篇十三』)の朗読を終えると、教師の眼鏡の奥が、にいと笑った。そして、教壇の下に用意してあった大きな紙袋を持ち出し、そのなかからいくつもの小さな紙袋を取り出したのだ。

「あ、また『銀の匙』の玉手箱が開くぞ」少年の目は瞬時に輝き、身を乗り出すと、はたして、教師は期待通りに生徒に小袋を配りはじめる。

手元に届いた小袋を覗いた雄一は、思わず、「あ」とも「え」とも「お」ともつかない奇妙な響きの声をあげてしまった。

中身を机の上におちまけると、ころがり出たのは赤、青、茶色、色とりどりの球状や棒状、魚のかたちをしたもの…。

駄菓子だった。(中略—引用者)

教師の朗読に生徒が合いの手を打つように、教室のあっちこっちから、飴を噛み折る音が響く。

雄一は甘い風を口の中に感じながら、作者・中勘助の形容の妙に浸っていた。

「普通なら飴を噛み折る音って『ぼきん』『ぼきん』というかもしれないけれど、確かに『こっきり』のほうが優しくて、甘い味の感じがでているなあ」

授業のはじめに配られていたプリントに《表現が美しいと感じた部分をそのまま書き出してみよう。そして、その理由も書いてみよう》という設問と、ふたつの書き込みスペースがあった。

雄一は、
(蒼や赤の縞になったのをこっきり噛み折って吸ってみると鬆の中から甘い風が出る)と、自分の文字で書き込み、次の理由のスペースには、自分の思いをそのまま書き込んだ。

引用が長くなったが、具体的な橋本武の『銀の匙』の教室の様子を彷彿とさせる記述である。「設問」に対して生徒が様々に記述した内容を自由に発表しあい、理解や感想を深め合ったものと考えられる。橋本武は、この場面では取り上げられている駄菓子だけではなく、可能な限りの様々な駄菓子を自ら集めて生徒に配布し、この授業に臨んだものと推測される。「駄菓子＝安価な材料を用いた粗製菓子。下等の菓子。一文菓子。」(広辞苑・第2版)というだけではなく、一人一人の生徒にとって、ある意味で親しく懐かしく、また逆に珍しい、様々な思いのある「駄菓子」である。生徒は、その「駄菓子」について、思い出し懐かしがるだけではなく、その思いや考えを発表し合い話し合いたい「思い」や「感想」を持ったに違いない。その一人一人の生徒の「思い」や「感想」の話し合いや発表、あるいは「つぶやき」から授業(学習)が始まるのである。それは、文字通り、一人一人の生徒が自由に自分なりの「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える。」時であるとともに、同時に、学級全員の「①・寄り道する。②・追体験する。③・徹底的に調べる。④・自分で考える」活動を交流し合い「読み」を広げ深めあう学習の場ともなったのである。

5. おわりに

スローリーディングを成立させるためにはどのような留意点や方法があるのか。

さらには、一人一人の学習者がスローリーディングによって身につくとされる「1. 語彙が増える」「2. 自分で考える力がつく」ことを実感できる指導はどうあるべきであろうか。さらに考察を進めたい。

—「銀の匙」の授業は、灘中だから成功したのでしょうか。—
中学だからでしょう。公立だろうと私立だろうと、ああいうやり方なら、子どもたちは近づいてくる。いまの子は、帰っても塾やお稽古ごとで、じゆうになる時間が少ない。塾で自由に遊べない子が、学校で自由に学べる、自分から行動できるようにし向けていけば、学ぶことが楽しくなるんですよ。(「人生の贈りもの⑥ 国語教師 橋本武(99)」—120歳まで生き、死ぬまで授業したい—
(朝日新聞 2012年4月20日 第6面)

〈注〉

- (1) 橋本武『灘校・伝説の国語授業』(2014.1.23 宝島社)「あとがき」230ぺ
- (2) 橋本武『伝説の灘校国語教師の「学問のすすめ」』(2015.3.17 PHP)15ぺ～16ぺ
- (3) 同(2)19ぺ
- (4) 同(2)22～23ぺ
- (5) 「『銀の匙』解説」和辻哲郎(1935.11.30 岩波文庫)224ぺ
- (6) 同(1)18ぺ
- (7) 同(2)22ぺ
- (8) 同(1)20ぺ
- (9) 同(6)25ぺ
- (10) 同(1)34ぺ～36ぺ
- (11) 『銀の匙 中勘助 橋本武案内』6ぺ～7ぺ
- (12) 同(11)18ぺ～20ぺ
- (13) 同(11)32ぺ～33ぺ
- (14) 伊藤氏貴『エチ先生と「銀の匙」の子どもたち・奇跡の教室・伝説の灘校国語教師・橋本武の流儀』16ぺ～19ぺ